

作物名：麦類

病害虫名：オオムギ縞萎縮病（病原：*Barley yellow mosaic virus*）

コムギ縞萎縮病（病原：*Wheat yellow mosaic virus*）



被害ほ場の様子

萎縮症状

罹病株

葉の病徴

1 被害の特徴と診断のポイント

症状と発生生態はオオムギとコムギで似ているが，別々のウイルスによって起こる病気であり，相互には感染しない。畑での発病は，ほぼ同心円状に中心部ほど症状が激しい場合が多い。発生部分の拡大は，畦方向に沿って起こる。水田裏作地での発病は，ほ場全体に発病が認められる例が多い。

2～3月頃に，新葉に退緑斑点が現れ，やがて黄白色となり縞状になる。葉身，葉鞘の生長が抑制され，モザイク症状は葉鞘伸長期に萎縮症状とともに目立つようになる。病株は分けつが減り，草丈が短くなる。根の生長も悪く，新根の発生が顕著に減る。重症株では下葉が黄化するとともに未展開葉が壊死を起こし，株が枯死することもある。

2 伝染源及び伝染方法

土壌伝染性のウイルス病である。土壌中残根に生存しているカビによって病原ウイルスが伝搬される。

3 発病・伝染好適条件

- ・早播き
- ・播種後，降雨が多く，感染に好適な地温が長く続く場合
- ・感染後，潜伏期間の気温が低い場合…発病後の低温は症状の回復を遅らせて病勢の進展を助長する。

4 防除方法

耕種的防除

- ・同一麦種の連作を避け，発生を予防する。
- ・数年間麦種転換することで，発病が軽減される。
- ・激発地では，5年間くらい作付けを行わない。
- ・深耕(25cm)すると，発病をある程度抑制できる。
- ・播種量をやや多くし，晩播きすると発病を軽減できるという報告がある。
- ・土壌伝染するため，農機具に付着した病土の移動は被害の拡大の原因となることから，被害ほ場は作業を後回しにする。

5 出典

(1)参考文献：みやぎの麦類・大豆栽培技術指導指針（宮城県）

原色病害虫診断防除編1（農文協）

日本植物病害大事典（全国農村教育協会）

(2)写真：宮城県病害虫防除所撮影